

連載

ニワトリの獣医師と呼ばれて10 ～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

信仰の山・御嶽山

日本の屋根と言われる日本アルプスの中に、長野県と岐阜県を跨ってそびえる御嶽山と呼ばれる有名な山がある。『木曾のおんたけさん』と

言えば、読者の方々も一度は耳にしたことがあるのではなからうか。ガイドブックには、『奈良・平安の時代頃から信仰の対象として信者の畏敬を集めている巨峰(標高三〇六七メートル)である』と記載されている。この山には、現在でも全国から毎年数百万人も白装束の衣装を纏った人々が集まるという。

通称、体育会系微生物と呼ばれるわが研究室の先輩方からのささやかな洗礼をクリア(前号参照)した筆者は、研究室配属前の四年生ながら夏休みに企画されている講座旅行に誘われた。

ある日突然五年生のI先輩からの誘いがあった。

「講座旅行で御嶽山行くのだけど、オマエも行くか?」

「私が行ってもよいのですか」

「H教授からOKいただいたいておいたよ」

とは六年生の先輩。

「ラッキー! ありがとうでございます。先輩方!!」

獣医学科の各研究室では、夏休みになると全く何もしない言葉どおりの夏休みをとる研究室と、盆休暇もなしに研究に明け暮れる研究室がある。

年中無休のわが体育会系微生物では、親睦を深めるための小旅行を企画し、海や山へ繰り出すのが慣例となっていた。ボスであるH教授の趣味が渓流釣りであったせいか、旅行先が山であることが多かった。

しかし、旅行先の御嶽山がどこにあるのか、筆者は知らない。そこで、「ところで、御嶽山は何処にあるのですか? 高い?」と聞いてみた。

「長野と岐阜の県境だ。高さは、三〇〇メートルオーバーだ」

とはI先輩の答え。

「マジですか? 私、筑波山(ちなみに標高八七六メートル)しか登ったことないよ」

筆者の育った茨城には山といえ

「四六の蝦蟇」で有名な筑波山しかない。標高を聞いていささか腰が引ける。筆者はアウトドア派ではない。それどころか、髪の毛に蜘蛛の巣が引つかかることでも嫌いな少年だった。

加えて記憶を辿ってみれば、筆者の両親が養鶏場で働くようになってから、筆者はどこかに連れて行ってもらった記憶がない。幼い頃から一人前の労働力として計算されていたので、休みといえば作業の手伝いと相場が決まっていた。

冷静に考えてみると、養鶏場での仕事は、セブイレブンよりも早くから年中無休だったので仕方がなかったかもしれないが……

「問答無用。ご来光を見るゾ!」
I先輩は筆者の思いなど気にもかけない。先輩方とのやりとりの中、「あの頃は友達と遊ぶ約束はできなかったな」

と筆者の脳裏には少年時代の記憶がほろ苦く浮かんだ。

この稿では当時筆者が感じたことをできるだけそのままに綴るようになっている。当時の筆者の心情としては、イヤイヤながら養鶏場の仕事を手伝った少年時代は真つ暗なイメ

ジであり、貧乏な大学生時代には、わずかに希望の光がさしていたもの、どこかに卑屈な気持ちがあったことは否めない。

今、世の中には常に自分を悲劇の主人公にしたがる人間が多いものが、当時の筆者もそうであった。無意識に自分自身で負のイメージを作り出し、それに酔うことで自分をごまかしていたのかもしれない。

筆者の世代を基準にすれば、たしかに筆者のような境遇は非常に珍しいのだろう。とすれば、人とは異なる惨めな環境に対する思いから、筆者自身が常に負のイメージを背中に背負っていたことも仕方ないこととも思える。

しかし、筆者の世代から五年、十年、あるいは二十年と世代を遡れば、筆者が死ぬほどイヤだと思つた養鶏場の仕事のレベルは、朝飯前だと感じられるほどのハンダグリー(貧しい)という意味ではない)精神に富む生活をしてきた人が多かった。

現に、ピーピーキューシーに奉職して養鶏経営者の方々の体験談をお聞きすると、若かりし経営者ご自身が『腰の上まで鶏糞に浸つた状態で懸命に除糞作業を行つた』とか『年

中無休で明け方から夜中まで働いた』などという凄まじいばかりの経験を積まれてきている。

今の養鶏業界しか知らない人からみれば、これらの方々のされた数々の経験は、今の世代の想像をはるかに超えるものである。しかし、見方を変えると、逆境に対して前向きに乗り越えることができたから、現

目指すは、ご来光!

講座旅行の当日、先生方をはじめ

研究室のメンバー総勢十数名が数台の車に分乗して長野県の本曾福島に向かった。道中は、日頃厳しい表情の先生方も穏やかな表情に変わり、まさに『和気あいあい』とはこのことだ。車中にて、『ご来光を見るゾー』と一人張り切るI先輩。

「I君、本気なの?」

と六年生の女性。

「本気ですよ。当然、白田もメンバーだ」

とは、かのI先輩。

「ご来光って何ですか?」

脳天気、全く無知な筆者一人である。

「山頂で朝日を見ることだ」

在の社会的評価があると言えよう。

そんな観点から考えると、古き良き時代の片鱗を経験し、しかも逆境を曲がりなりに乗り越えることができた筆者は幸せだったのかもしれない。筆者はやつとそう思えるようになったのである(少しは大人になったかな)。

とI先輩が教えてくれる。

「山頂で朝日? 何時間で頂上に着くのですか?」

「皆のペースを考えると、三時間は必要かな」

「それじゃ、夜中の二時頃に宿を出発ですか?」

「当たり前だ」

こうした会話がI先輩と筆者の間

に続く。

最後の筆者の『午前二時に出発』

のセリフに言葉がつまる一同。

「……」

夜中の二時と言えば、いつもなら

筆者が寝る時間である。生活費や授業料のために、夜中や長期休暇はアルバイトに励む筆者は、このころ完

全夜型人間となっていた。

I先輩の号令にも、半信半疑の研究室生たちに対して、H教授やY先生、I先輩は本気である。

結局、午前二時に叩き起こされ、研究室生たちは御嶽山山頂へ向かうことになった。まさに、体育会系。

登山道に到着すると、筆者は結構登山者が多いことに大変驚いた。さらに、登山者の格好が特徴的だった。彼らは白装束の衣装をまとい、木刀

のような杖を持っていた。しかも、これらの人々にはご老人といつて差し支えないような年配者が多い。

「こんな爺さん婆さんも登るのか……」

と内心ショックを隠し切れない。

不規則な食生活と極端な運動不足のせい、一〇キロもの脂肪が腰まわりについて、二十代前半にて既に肥満していた筆者であったが、ジジ・

ババに負けるわけにはいかない。気合を入れて登り始めた。

幸い腹は出ていてもサッカーで鍛

えた筆者の足はまだ健在で、これと

いうこともなく、山頂に到着することができた。

残念ながら、雨まじりの天候でご

来光を拝することはできなかった。

山頂にある神社では、土下座してご祈禱している大勢の白装束の集団の姿には何とも言えない厳肅なムードが醸されている。

突然、白装束の集団の脇に信じられない音楽と光景が現れた。

I先輩が場末のストリップ劇場の曲を口ずさみつつ、トランクス一枚の姿で、ボディビルダーのポーズをしながら踊っている!!

一同絶句「……………」。

どうやらI先輩にとつて登山して頂上に着いた時にする、お約束の喜

びの表現らしい。この光景を見て、「かなりの大物か、馬鹿だ」と筆者は確信したものである。

実は、この先輩も生活費は自ら捻出していた苦学生であった。筆者と共通点があったのだ。

ともすれば、銭がないことで卑屈になりがちな筆者に対して『よく遊び・よく学べ』といった何事にも前向きな彼の姿勢を見て、苦笑しながらも、筆者は何かを教わったような気がしたものであった。

伝家の宝刀 ↓ IBD (ガンボ口病)

昨年(平成十四年)の秋に、母校でわが恩師であるH教授が会長となり獣医学会が開催された。学会長を仰せつかることは、獣医学系の研究に携わる者の世界では大変名誉なことである。おまけに、H教授は、これまでの業績に対して『紫綬褒章』という勲章まで在職中に授与されていた。

「こんなに偉い先生だったとは……」

正直なところ、卒業して十年経過する今日まで知らなかった筆者は不

肖の弟子ですね。大変失礼!! ゴメンナサイ。

少し余談に逸れたが、実は筆者が研究室に通い始めたばかりの秋にも、母校で獣医学会が開催された(平成三年秋)。この時、筆者にとつて印象的だったのが、わが研究室から発表した『IBD』に関する発表だった。IBDとは Infectious Bursal Disease の略で、養鶏家にはガンボ口病という呼称の方がなじみ深い。この鶏病は、人間で言えばエイズのように、基本抵抗力をなくすもの

だと想像してもらえば理解しやすいかもしれない。つまり、原因ウイルスであるIBDウイルスがファブリキウス囊というニワトリに特徴的な免疫を担当する臓器をターゲットにして増殖し、免疫系を破壊する。免疫系が破壊されれば、健康体の時には発症しないような疾病にさえ悪影響を受けることになるわけだ。

当時、野外で問題とされていたガンボ口病は、従来のワクチネーションでは防ぎきれないとされる超強毒型と呼ばれるものだった。この鶏病を研究テーマとしていたY先生は、先輩方と一緒にウイルスの弱毒化や感染実験、あるいはウイルスの遺伝子解析を頻繁に行っていた。

大学の研究には、将来の基礎情報として積み上げられる研究(基礎研究)、あるいは世の中に即戦力の技術として認められるもの(応用研究)がある。両者とも科学技術の発展のためにはともに重要である。基礎研究は一步間違えれば、本質を追求せずに研究のために研究するといった本末転倒な状況に陥りやすいという面を持つ。

最近、新聞報道された『タマゴを毎日二個食べる女性は寿命が短い』

などといった研究は、真意は別にあったのかもしれないが、報道内容からみ判断すると本質から外れていると言わざるを得ない。

その意味では、このIBDに関する研究はフィールドに直結していた。学会発表の際にも討議が活発に行われていた内容で、この研究室にとっては『伝家の宝刀』のような一つの看板テーマになっていたのだ。

筆者は、ニワトリ関係の研究には非常に興味を持っていたのに加え、現場に密着している様子が大変気に入った。フィールドに直結する、イコールフィールドに近い環境で研究する。それが研究室ではニワトリを使った感染実験であるわけだ。

『ニワトリを扱わせたらピカイチ』という筆者の噂は獣医学科内でも広まっていたので、感染実験をする際には重宝された。

「白田、今からウイルスをニワトリに接種するから手伝って!」

とのY先生の依頼に対して、著者は、請け負いながら尋ねた。

「承知しました。ニワトリは何日齢ですか?」

「二十八日齢のトリを一〇羽だけど、保定は大丈夫か?」

「楽勝です。片手で一〇羽ぐらい
軽いですね」

その上で著者は感じた疑問をぶつ
けてみた。

「ところで、IBDウイルスの最
良の接種時期は、二十八日齢なん
ですか？」

「実験室レベルでは、二十一日齢
から二十八日齢だと思ふよ」

「養鶏場でもそうですか」

とさらに質問すると、

「野外では、要因が複雑だから一
概に言えないナ」

といった具合で、先生とのデイス
カッションが続く。

海外では、研究者同士がロビーで
コーヒーを飲みながら情報交換をす
ることをロビーデイスカッションと
いうらしい。学会発表が建前ならば、
この種のデイスカッションが本音の
部分の生きた情報なのだ。

感染実験がスタートすると、休み
もない飼育管理や観察が必須とな
る。この種の仕事は、当然下級生の
担当だ。筆者は養鶏場での仕事はイ
ヤであったが、「このニワトリはど
うなるのだろうか」と思うと、観察日
が休みでも全く苦にならなかった。
苦になるところか、逆に気になって

仕方がなくなるのだ。

超強毒型のIBDウイルスを接種

されたニワトリは、三日から五日間
のうちに元気消失、意気消沈といっ
た様子で死んでしまった。解剖して
みると、総排泄口(肛門とタマゴが
排出される共通の出口)の背中側に
あるファブリキウス嚢が血まみれに
なっていた。血まみれのファブリキ
ウス嚢を見て、

「すごい出血ですね」と苦手な血
を見て驚かなくなった筆者(成長
済)。

「特別な(Special)病原体(Pa
thogen)を持っていない(E-Free)SP
F鶏にウイルスを接種したから、な
おさらだ」と答えるY先生。

「別室の群は、症状が比較的軽い
ですね」と筆者。

「その群は、市販の生ワクチンを
接種してあるからさ」とY先生。

「でも、このニワトリの様子だと
農場では淘汰ですね」と筆者。

「そうか…。まだまだ解らないこ
とが多いな。また違う角度から実験
してみないとナ」と謙虚な姿勢で
黙々と作業を続けるY先生であっ
た。

筆者にとって、身をもって体験し

た実験や研究室での会話などが非常
に役立つことを実感している。

高校時分に、「この教科書のこの
部分は間違っている」と頻繁におっ
しゃる理科教師がいた。当時筆者は、
「教科書は正しいことしか載せない
はずだ。この先生こそどうかしてい
る」と思ったものだ。

この言葉に筆者が連想すること
は、ピーピーキューシーに奉職して
常に意識するよう指導を受けてい
る、「真実はフィールドにある。わ
からないことはニワトリに聞け!!」
といったドクターKの言葉だ。

よく考えれば、鶏病は初めにフィ
ールドで発生する。フィールドでは、
鶏病問題を解決しないと食っていけ
ないから試行錯誤しながら解決す
る。その間、学術的な裏付けなどを
するために、大学や様々な研究機関
がその問題を研究テーマとして取り
上げる。その研究成果が積み重なっ
て一般的な知識として世の中に定着
する。教育現場では、その定着した
知識を一部の人間が選択し、教育用
として教科書に掲載される仕組み
だ。つまり、教科書に載る事柄はす
でに過去のものであり、最新の事実
と異なることも充分ありえるのだ。

また、一部の人間が選択するので、
記載された事柄が、最新の事実や認
識とズレていることもある。これは、
対象がニワトリであっても、ヒトで
あっても変わらない。

現在フィールドには、「市販ワク
チンは国家検定を通過しているから
絶対安全だ」という認識をされてい
る方が非常に多いことに筆者は驚い
ている。この発想は、「教科書には
間違いが絶対ない」という先入観と
共通のものではなからうか。

技術者にとって大切なことは、「真
実に対して謙虚である」という姿勢
だということ、筆者はこの頃感じ
ることができるようになった。その
基礎の芽を出して下さったのは、研
究室の先生方の黙々と実験するひた
むきな姿であったと思ひ、感謝して
いる。

一方、技術屋レベルで大切なこの
種のバランス感覚を、苦もなく直感
でとらえている養鶏経営者の面々の
偉大な力を痛感している。

(筆者・株)ピーピーキューシー 品
質管理&生産管理部門長/獣医学博
士/獣医師)